

---

# 疾風

藤宮紀晴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

疾風

### 【Z-UR-Δ】

Z9898A

### 【作者名】

藤宮紀晴

### 【あらすじ】

高校3年の夏。陸上部の俺はとうとう今年も補欠だった。思えば何も無かった、空虚な高校生活。ただ時の流れに身を任せ木の葉のように漂っていた俺は、「彼女」に出会つ……

## プロローグ

真つ青な空を見上げる。

いつか貴女に会いたい

叶わぬ想いは空に散つて風になつた。

汗臭い部室の窓からは薄い光の筋が差している。何人かのむさ苦しい男たちが狭い部屋に密集している。見ているだけでも眉間に皺の寄る光景だ…。

「秋の選手は 」

顧問のやたら野太い声が室内に響く。誰も何も言わない。皆、結果は分かつていてるのに。

ふと右側を見ると、昭吾と田が合つた のは氣のせいだろう。彼の目はどこか遠くを見るように顧問に向いていた。

「……、短距離、渡辺」

はつ、と我に帰った昭吾は焦点を合わす。

「以上。特に3年、期待してる。」

顧問の田中じいと昭吾を見据えていた

高校3年。幼馴染みの昭吾と話さなくなつて3年目。

想像通り、何の不思議も無い、俺の最悪の夏は始まった。

## プロローグ（後書き）

駄文です（涙）

初連載ですが、頑張りますっ。

その日は1学期の終業式と選手発表。その後は自主練習だった。

といつても、グランドのスペースは限られているもので。そこは選ばれし者たちの場所。

つまり3年の中で唯一補欠の俺の居場所は無い。

そんな安易な言い訳を自分に言い聞かせ、グランドの隅を制服姿で横切る。

遠いグランドの反対側に、昭吾の走る姿を見た。

俺の3年間は、この繰り返し。思い返せば、真剣に走ったことがあるのだろうか？

否。

いつも真剣に走った。練習の時。選手選抜の時。

いつも体が重かった。必死に前に進もうとしても、走っている実感すら無かつた。

足が遅いわけではない。その証拠に小学校の運動会ではいつも1位だつたし、中学の陸上部では1年の時から選手だつた。

そして何の迷いもなく入った高校の陸上部で俺は初めて、あいつの隣で走ることになるのだ。

あいつ 昭吾とは幼稚園の時からの幼馴染み。ずっと仲が良かつた。あいつが父親が厳しく中学受験をして私立に行つても、俺らは週末には必ず一緒に遊んでいた。

中学3年。俺が受験で遊ばなくなり、会わなくなつた頃。あいつの父親が急死した。俺には難しい病名。

その葬儀で久々に会つた昭吾は、相変わらずだつた。昔の、いつも通りのあいつ。変わらない姿に安心した。

教育熱心な父親がいなくなつた上、家が財政的に厳しくなつた昭吾は私立中学をやめ、俺と同じ公立高校に進学することになった。

入学式で会つたあいつは、葬儀から半年しか経つていない筈なのに、まるで別人だつた。

中学の頃のあいつはどうちらかというとひょろひょろした体系で、骨太な俺の隣を歩くと滑稽な程だつた。けれどいつのまにか彼の体は形の良い筋肉と小麦色の肌に骨を覆われていた。

入学式の日、結局俺は彼の後ろ姿を見ているだけ。会つたらまた一人で馬鹿しようと思つていたのに。くだらない話をしているはずなのに。

それでもそのとき俺はまだ、あいつのことは大して気にかけていなかつた。別にそれまでやたら一緒にいたわけでもない。他に同中のツレはいっぱいいる。幸か不幸か俺たちとは違うクラスで、しばらくは接触する機会もなかつた。

それからしばらくして1年がクラブに入部し始める。先輩たちは部員の勧誘に必死になり、1年は吟味に吟味を重ねて入部。中学3年間選手、記録所持者の俺は何の迷いもなく陸上部。先輩も顧問も当

然のこととして見ていた。勿論俺も。

そしてそれは入部初日。

入部当初のタイムを記録しておぐため、俺たちはトラックのスター  
トラインに並ばされた。

履き慣れたスパイクの紐を締め、軽く土を払つて立ち上がる。見上  
げると、吸い込まれそうな青い空が何処までも広がっていた。

ふと、隣に響くスパイクと地面が触れ合つ重い音……何気なく、振  
り向いた。

真っ青な空をバックに堂々と立つあいつの姿。ただ真直ぐに、トラ  
ックの遠くを見ていた。

「昭吾。」

今思えば、照れ隠しだったのか、動搖を悟られたくなかったのか。  
中途半端に引きつった笑顔で、まるで中学時代のように、あいつの  
名を呼んだ。

あいつは……

ちらりと俺を一瞥し、軽く礼をした。……同じスタートラインに並  
ぶ者として。

その顔は微塵も笑つてなどいなかつた。

その瞬間、俺は何も考えられなくなつたことをはつきりと覚えてい  
る。

どこか遠くの世界でピストルの音が響き、条件反射で片足が出る。空を切り、風に乗つて……感触は、今までと全く違つた。

足は重く、ものすこい勢いで地面に吸い付けられる。どんなに足を交互にあげても、景色はその場で留まつていて。進まない、進まない。

そして気が付いたら、俺の前にあいつの広い背中。

びつじょりもなかつた。

空の青は冷たく、スパイクは俺を何度も何度も地面へ縛り付けようとする。

それが、俺とあいつ。



## 1 (後書き)

まだ説明的な部分ばかりで展開が無いですが…。次から展開する予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9898a/>

---

疾風

2011年1月26日15時27分発行